

15:05 導入



まず、牧野先生は、大きな蛇口の横にある粗末な蛇口を使う黒人の写真をプロジェクターに映し、黒人が粗末な蛇口の方を使う理由を生徒にペアで話し合わせた。先生に指名された生徒が「大きな水道は白人しか使えないから」など、英語で述べた。次に、人種差別を表す看板を映し、20世紀前半のアメリカにおける差別の実態を伝えた。

授業
ハイライト

●2年生「コミュニケーション英語II」で、人種差別をテーマに人権問題について考える「The Fight for Voting」の全7時間のうちの1時間目。本文を読み、人権について自分の意見を持つ。授業では教師も生徒もすべて英語を使う。(P.27に単元の指導計画を掲載)

主体的・対話的で
深い学びへ

実践
アクティブ・ラーニング

英語

生徒に自分の意見を表現させる 活動中心の授業で、 4技能をバランスよく伸ばす

初めは小学校の教師だった牧野剛士先生は、高校の英語科教師に転身した直後、自身が高校時代に受けていた講義形式で訳読中心の授業を行っていた。「そうした授業で、生徒が実践的な英語を身につけることができるのかという不安がありました。どうすればよいのか手探りの

大学院進学を機に、
自身の指導を見直した

牧野先生のアクティブ・ラーニング



福井県立敦賀高校

牧野剛士 つるが まぎの・たけし

教職歴15年。同校に赴任して9年目。

進学指導部。英語科担当。

小学校教員としてキャリアをスタート。

5年前の大学院進学が転機となり、

アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善に取り組む。

福井県立敦賀高校

◎敦賀高等女学校、敦賀商業補修学校、県立敦賀中学校等を母体に創立。文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」アソシエイト校、OECD「地域創生イノベーションスクール2030」の福井クラスターとして、環境・エネルギー分野の探究学習に力を入れる。

◎設立 1948(昭和23)年

◎形態 全日制/普通科・商業科・情報経理科/共学

◎生徒数 1学年約210人

◎2018年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、東京大、福井大、大阪大、神戸大、広島大、福井県立大などに88人が合格。

私立大は、慶應義塾大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ202人が合格。

◎URL <http://www.tonkou.ed.jp/>

生徒全員が起立し、各自で本文を黙読し、読み終わった生徒から着席した。次に、ワークシートにある True or False の3問にペアで取り組んだ。解答者はジャンケンで決める。答える際には「最初の文章はT、なぜなら……」と、T or Fの根拠を本文の中から示すのがルールだ。そして、先生に指名された数人の生徒が3つの問いの答えを英語で発表した。

牧野先生は、今のアメリカは多様な人種が同じ社会に共存すると説明し、「きっかけをつくったのは誰か」と問いかけてから、本文のリスニングを行った。本文の内容は、バスに座っていた黒人女性が運転手から白人に席を譲る(stand)よう言われて拒否し、刑務所に入れられたという話だ。生徒はCDから流れる音声で2回聞いた後、本文の内容をペアで確認し合った。

状態でした」と、牧野先生は当時を振り返る。

活動主体の授業を模索する中、転機となったのは5年前、大学院生になったことだ。1年間休職し、母校の福井大学で恩師から英語の指導法を学び直した。さらに、先進校の授業を見学し、外部の英語指導の研究会にも積極的に参加して、知見を広げていった。そして、大学院生2年目は、教壇に立ちながら論文を書いて修士課程を修了した。

大学院時代に牧野先生が学んだことは、授業で生徒に自分の意見や思いを表現させれば、自然に英語力が身につく、そして、授業だからできる学習をさせてこそ、思考力を高められるという指導だった。大学院での経験を踏まえて、4技能のバランスのよい習得と生徒の意見や思いを大切に、現在の授業スタイルが生まれた。

思考の活性化・深化への配慮

授業の最初と最後に必ず英語で意見を述べさせる

生徒の思考力を高めるために牧野先生が最も重視しているのは、生徒に自分の意見を持たせることだ。そこで、毎回必ず、授業の最初と最後に、生徒が自分の意見を表現する時間を設けている。今回の授業では、導入時に人種差別を象徴する写真を見せて生徒同士で話し合わせ、授業の後半では自分が本文に登場した黒人女性の立場ならどうするかを、まず個人で考え、

次に3人1組で交互に意見を述べさせた。自分の言葉で語ることによって、実践的な力を身につけ、併せて人種差別を自分事として捉える感性を養うというねらいがある。

「日本語においても、人は自分の意見や思いを言葉にすることで言語能力を獲得してきたはずです。英語でも、自分の意見を述べさせることで実践的な語学力が身につくと考えています」(牧野先生)

そうした活動の鍵は、生徒から多様な意見が出てくる問いを投げかけることだ。今回も、差別に対する怒り、悲しみといった感情のほかに、人種差別は当時の常識(Common Sense)だから何も感じない(Nothing)といった意見が挙がった。そうした多様な意見に触れることによって、生徒が自身の考えを深めていくことも、授業のねらいだ。

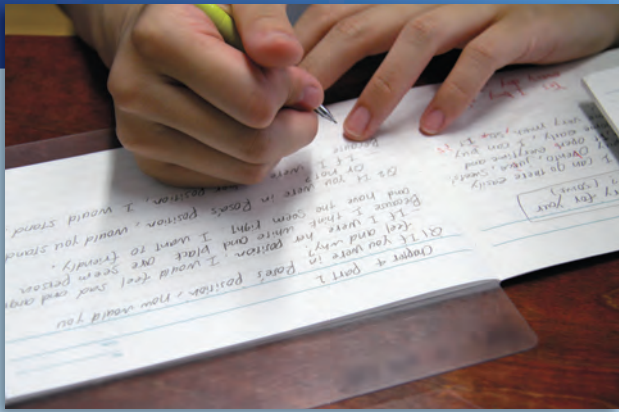
家でできることは家でやる、

授業だからこそできる学習を重視

授業の最後に、問いについての自身の意見を英文で改めて書かせることも、思考を深めるための工夫だ。ペアやグループでの活動を踏まえて、最終的には自分で考えることで、洗練された英文を書けるようになるという。

その際に使うのは、A4判のノートを半分に分断した「Think & write ノート」だ。A4判では英文をたくさん書いても余白が生まれ、物足りなさを感じてしまう。そこで、ノートを小さく

15:42 オピニオンをノートにまとめる



授業の最後に、本時の活動について、①オピニオン、②発音・声量、③コミュニケーション、④会話のそれぞれについて3段階で自己評価を記入。そして、何を感じ、どう行動したかの問いについて、全体発表の意見も参考にしながら、自分の意見をノートに書いた。ノートは牧野先生に提出。後日、牧野先生は添削して返却する。

15:30 オピニオンをグループでシェア

自分が黒人女性の立場だったら、何を感じ、どう行動したか。理由を含め、個人で1分間考えた後、3人1組になり、1人1分間で意見を述べ合った。そして、牧野先生に指名された数人が発表。感じたことは「sad」「angry」「nothing」が挙げられ、行動については全員が「stand」と回答。その理由は「刑務所に入るのは嫌だから」「当時の常識だから」と英語で説明した。

くし、そこにぎつしり書かせることで、生徒が達成感を得られるようにしている。

また、生徒が英語を使う時間を多くするため、牧野先生は授業で使うワークシートを事前に配布し、本文の通読や新出単語の確認、ペアワークで行うT or Fの準備など、生徒に予習をさせている。新出単語やイデオムの解説はワークシートに書いておき、授業での説明は5分程度で終わらせ、時間がなければ割愛する。

「1人でもできる学習は自分自身で行い、授業では友人とのコミュニケーションなど、1人ではできない学習に時間を充てるようにしています」

場づくりへの配慮

語数を増やすことを意識させ、発話への積極性を引き出す

今では、生徒は自然に英語を話したり書いてりしているが、入学当初は積極的に英語を使う姿勢が見られなかった。そこで、牧野先生は、生徒が文法の間違いや発音のよしあしを気にせず、積極的に英語を使える環境づくりを心がけてきた。

その工夫の1つが、発話語数への意識を持たせることだ。3人1組でグループワークを行う際、1人目は自分の意見を述べるスピーカー、2人目はそれを聞くりスナー、3人目はスピーカーの発話の語数を数えるカウンターとする。

リスナーは、スピーカーの発言を聞き、言葉に詰まった時には質問を投げかけて、話が続くようにする。そして、カウンターは、スピーカーが1分間に話す英文の語数を数える。

「語数を数えることで、スピーキング力をもっと高めよう、内容の濃い意見を言おうという意欲が喚起されることを期待しています」

1年次からオール・イングリッシュで話すよう促してきたことも、工夫の1つだ。生徒が話しやすいよう、難しい単語や文法を使わず、自分の知っている英語で話すように言い続けた。そして、生徒の発言がたどたどしく、単語の羅列であっても、牧野先生は細かな文法の間違いを指摘せず、生徒が伝えようとしていることをくみ取り、フォローする。それらの支援を地道に繰り返すことで、生徒は抵抗なく英語を話せるようになっていった。

成果と課題

生徒主導で学びを深める活動を取り入れていきたい

最大の成果は、生徒が積極的に英語を使って活動するようになったことだ。スピーキングやライティングでの語数が増え、1年生から牧野先生の授業を受けてきた生徒の多くが、4技能すべてが伸びていると実感している。牧野先生が以前に担当した学年では、1年次から2年次にかけての1年間で、「GTEC」のグレード5

単元の指導計画

【教科・科目】英語・コミュニケーション英語Ⅱ 【単元・作品】Chapter 4『The Fight for Rights』 【設定時数】全7時間の中の1時間目
 【単元目標】人種差別についての歴史を理解し、「人権」について自分の意見・考えを英語で表現できる。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	Part1 アメリカで人種差別がなくなっていったきっかけ	①リスニング・リーディングを通して、Part1の内容を理解できる。【知識、技能】②ローザの立場になって考え、自分の意見を表現できる。【技能、思考力、表現力、協働性】	①アメリカでは人種差別が行われていた事実を知り、差別解決のきっかけをつくった人物について学習することを知る。②リスニング・リーディングを通して、Part1の内容を理解する。③自分がローザの立場だったらどうしたのかを話し合う。④自分の意見を「think & write ノート」に書く。	【主体的な学び】画像を用いた導入で、人種差別の歴史について興味・関心を持たせる。コミュニケーション活動後の自己評価シートへの記入。【対話的な学び】ペアワークを多く取り入れ、スピーキング・リスニングの機会を増やす。コミュニケーション活動では、自己評価シートの項目を意識させる。【深い学び】登場人物の立場になって考えさせる。様々な意見を発表させ、それを教師が板書し、多様な考え方があることを学ぶ。	・ワードカウンター ・ワークシート ・think & write ノート
2	Part1と、Part2 ローザの事件と黒人解放運動の始まり	①Part1で出てきた表現を理解できる。【知識】②本文の意味を意識しながら、音読活動ができる。【技能、表現力】③ローザがバスの席を立たなかった理由について、自分の意見を表現できる。【技能、思考力、表現力】	①Part1で用いられている新出の英語表現の解説を聞く。②意味を意識しながら、音読活動を行う。③Part2の前段階として、ローザがバスの席を立たなかった理由を考え、意見を発表し合う。	【対話的な学び】ペアワークを多く取り入れ、スピーキング・リスニングの機会を増やす。コミュニケーション活動では、自己評価シートの項目を意識させる。【深い学び】登場人物の立場になって考えさせる。様々な意見を発表させ、それを教師が板書し、多様な考え方があることを学ぶ。	・ワークシート
3	Part2 ローザの事件と黒人解放運動の始まり	①リスニング・リーディングを通して、Part2の内容を理解できる。【知識、技能】②当時の黒人の立場になって考え、自分の意見を表現できる。【技能、思考力、表現力】	①リスニング・リーディングを通して、Part2の内容を理解する。②自分が当時の黒人だったら、ボイコットに参加したかについて話し合う。③Part2で用いられている新出の英語表現についての解説を聞く。④意味を意識しながら、音読活動を行う。	【主体的な学び】コミュニケーション活動後の自己評価シートへの記入。【対話的な学び】ペアワークを多く取り入れ、スピーキング・リスニングの機会を増やす。コミュニケーション活動では、自己評価シートの項目を意識させる。【深い学び】登場人物の立場になって考えさせる。様々な意見を発表させ、それを教師が板書し、多様な考え方があることを学ぶ。	・ワークシート
6	Part4 ローザから若者へのメッセージ	①リスニング・リーディングを通して、Part4の内容を理解できる。【知識、技能】②「差別をなくすために自分たちができること」について考え、自分の意見を表現できる。【技能、思考力、表現力、協働性】③Part4で用いられた表現を理解できる。【知識】④本文の意味を意識しながら、音読活動ができる。【技能、表現力】	①リスニング・リーディングを通して、Part4の内容を理解する。②「差別をなくすために自分たちができること」について考え、話し合う。③Part4で用いられている新出の英語表現についての解説を聞く。④意味を意識しながら、音読活動を行う。	【主体的な学び】コミュニケーション活動後の自己評価シートへの記入。【対話的な学び】ペアワークを多く取り入れ、スピーキング・リスニングの機会を増やす。コミュニケーション活動では、自己評価シートの項目を意識させる。【深い学び】「人種差別の歴史」から「身近に存在する差別」に話を移し、「差別」を自分たちの問題として考えさせる。様々な意見を発表させ、それを教師が板書し、多様な考え方があることを学ぶ。	・ワードカウンター ・ワークシート ・think & write ノート
7	まとめの英作文	①「差別をなくすために自分たちができること」について、クラスメートの意見を理解できる。【技能、多様性、協働性】②「差別をなくすために自分たちができること」について、自分の意見を80語程度で書くことができる。【技能、思考力、表現力】	①ペアワーク→グループワーク→クラス全体での発表（グループ代表者）といった流れで、前時に考えた「差別をなくすために自分たちができること」を共有する。②「差別をなくすために自分たちができること」について、自分の意見を80語程度で書く。	【主体的な学び】「差別をなくすために自分たちができること」について多様な考え方があることを知る。【対話的な学び】ペアワーク→グループワーク→クラス全体での発表（グループ代表者）といった流れで意見を共有し、自分の意見を話したり、他者の意見を聞いたりする機会を増やす。【深い学び】「差別」を自分たちの問題として考えさせる。様々な意見を発表させ、それを教師が板書し、多様な考え方があることを学ぶ。様々な意見を参考に自分の考えをまとめ、書くことで自分の意見を整理する。	・英作文

*牧野先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全7時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp/>) からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

生徒の声



以上が33人増加した。
 今後の課題は、生徒主体の活動を一層増やすことだ。
 「教師主導の場面が多かったので、例えば、4人1組となり、生徒が役割を分担して、探究的な学びを進めたり、生徒主導でディスカッションを行い、思考を深めたりする活動を取り入れたいと考えています」
 「まだまだ手探りの状態」と牧野先生は言う。
 4技能の向上と思考力を育むための試行錯誤は続く。

石原尚昌さん 英語力が伸びたのは、毎回授業で自分の考えを英語で話したり書いたりしてきたからだと思います。文法の正確さが気になって英語を話せない時があるので、自信を持って思いを伝えられるよう、文法力も高めていきたいです。

松葉康佑さん 無理に難しい表現を使わず、自分が伝えやすいように話したり書いたりすればよいという牧野先生のアドバイスを聞き、英語を使うことへの抵抗感が減りました。中学時代と比べ、4技能のすべてが伸びていると感じています。

松本聖矢さん ペアワークでは意見を述べ合うことが多く、自分とは異なる考え方に触れられるのが面白いです。発表の時には、英語がたどたどしくても、牧野先生がフォローしてくださるので、失敗を恐れずに英語を使えるようになりました。